

電車男

2005(平成17)年5月26日鑑賞〈東映試写室〉

★★★



監督＝村上正典／原作＝中野独人（『電車男』新潮社刊）／脚本＝金子ありさ／音楽＝服部隆之／出演＝山田孝之／中谷美紀／国仲涼子／瑛太／佐々木蔵之介／木村多江／岡田義徳／三宅弘城／坂本真（東宝配給／2005年日本映画／101分）

第2章

モテないあなたも映画で擬似恋愛

……大はやりのインターネット小説は単純で、『電車男』は現代の男性版シンデレラ物語……？ 「彼女いない歴」を背負って生きているモテない男たちには勇気を与える映画かもしれないが、いくらネット上の応援をもらっても、所詮それは幻想と考えるべし。ネット人間の多くが現実の話と架空の話の区別ができなくなったら、この国はやバイ……？ そして、茶化した戦闘シーンには断固反対！ 私としてはその撤回を求めたいが……？

電車男の原作は……？

この映画の原作となったのは、^{なかのひとり}中野独人作のインターネット小説である「電車男」。もちろん私はこのインターネット小説にアクセスしたことはないが、この映画のベースは、主人公の電車男（山田孝之）を中心としたインターネットにおける「2ちゃんねる」の掲示板サイト。もっとも、インターネット小説と言っても、その内容は不特定多数の「2ちゃんねる」への投稿者の投稿をまとめたもの。そのため、そこには本来「作者」などいるはずはなく、中野独人というのも、ちょっとおふざけ的に「インターネットの掲示板に集う独身の人たち」という意味の架空の名前だ。

サイトへの投稿者たちは……？

この掲示板に参加し、電車男を「応援」するメンバーは、基本的にヘンな奴ばかり。そのヘンなメンバーの第1は、よしが（岡田義徳）、たむら（三宅弘城）、

むとう（坂本真）の3人組。次は、引きこもりの青年ひろふみ（瑛太）。さらに女性としては、看護師の、りか（国仲涼子）。そして極めつけは、倦怠期にある夫婦の、ひさし（佐々木蔵之介）とみちこ（木村多江）。このひさしとみちこは夫婦でありながら、全く別の世界に「住んでいる」から、お互いが掲示板に書き込んでいることも知らないし、2人が共通してこの電車男の恋愛の行方を見守っていることも知らないまま別々に応援を……。こんな風に掲示板に夢中になっているヒマ人（？）を見ていると、インターネットとか掲示板とかによる友達探しや心の交流の良し悪しやそのプラス・マイナスをどう考えたらいいのか、私には正直わからなくなってくるが……？

インターネット小説は大ハヤリ……？

この『電車男』はインターネット小説が大ヒットした結果生まれた映画だが、私が3月27日に観た韓国映画『オオカミの誘惑』（05年）も同じように、大ヒットした韓国のインターネット小説を映画化したもの。この2つのインターネット小説や映画だけで決めつけてはいけなさそうだが、この2つの映画から私なりのインターネット小説の評価を下してみると、それは次のとおり。すなわち、①テーマが単純明解、②ストーリー展開もほとんどの人が推測でき、かつ納得できるもの、③そして、最後はハッピーエンド、というパターン。しかしそれって、あまりにも単純すぎるのでは……？

「電車男」と「エルメス」の出会い？

いつもうつむいて歩き、電車に乗ってもオドオドしているのが主人公の電車男。電車のドアが閉まろうとする直前、駆け込み乗車をしてきたのは、フワリとしたスカートから見えるスラリとした形のいい脚が魅力的な美しい女性（中谷美紀）。彼女は空いている席に座って1人本を読み始めたが、折悪しく今日この電車には、酔っぱらい状態のまま次々と乗客からんでいく中年のオッサンが……。一見してサラリーマン風だから、ヤクザみたいに怖くはないものの、それでもやはりこれを止めるのはものすごい勇気がいるもの。そのため乗客はみんな見て見ぬふり……。当然、電車男も同じだ。ところが、そのオッサンがいよいよ美女の前に立

って「お嬢さんは、どんな本を読んでいるのかな」などとほざきながら本をとりあげたから、この美女は怖がって口も利けない状態。すると、ついにこの電車男は勇気を出して……？

そのお礼に電車男の家に送られてきたのが、なぜかエルメスのティーカップ。そこで、この美女につけられた名前が「エルメス」というわけだ。

インターネットと小林泰剛事件

5月12日以降さかんに報道されている小林泰剛容疑者による「18歳少女監禁事件」は大きな社会的反響を呼んだ。これはいわゆる「ネット犯罪」という、非常に現代的な「犯罪類型」だが、この種の犯罪が恐いのは、本人自身、何が現実の世界で、何がネット上の架空の世界なのかの区別がつかなくなっている可能性が高いこと。

近い将来予測できる「21世紀型犯罪」の多くは、このように、何が現実の世界で、何がネット上の架空の世界なのかの区別がつかない若者たちによる犯罪になるのではないかと私は予測している。そしてそれは、ホントにコワイ世界……？

ネット上の殺人は自由？

ネット上ではいくら人間を殺しても、そして昔ならインベーダー、今ならゾンビをいくら殺しても誰からも文句は出ない。そればかりかたくさんゾンビを殺せば殺すほど「ゲーム」参加者の評価が上がるというルールになっている。したがってネット上のインベーダー殺しやゾンビ殺しでは、鮮血がほとぼしることもないし、返り血を浴びることもありえない。他方、『あずみ』（04年）や、『あずみ 2 Death or Love』（05年）ではものすごい返り血を浴びていたが、これはその演出効果をちゃんと計算したうえのもの……？ こういう設定の映画では、次から次へと斬って斬って斬りまくり、100人斬り、1000人斬りをすれば評価が高まるというもの……？

ふざけたネット上の戦争シーンだけはやめて……！

しかし考えてみれば、これは無茶ヤバイ話……？ そして、そんな私の恐れが

この映画ではモロに！ それは、電車男を応援するケッタイな「ヲタク3人組」の想像としての戦場シーンに登場している。すなわち、電車男が絶望状態に陥ると、このヲタク3人組も戦場において絶望的な状態に……。その結果、敗北は明らかであるにもかかわらず、玉砕覚悟で突撃、というホントは悲しいシーンを、面白おかしく登場させることに……。しかしこんなシーンは、ネット世代の若いヤツが面白おかしくパロディ的に観るべきものではないはず。

戦後60年の今……

2005年5月の今、60年前の「沖繩戦」の悲劇が毎日新聞の夕刊で連載されている。また60年前の戦艦大和の物語が『男たちの大和／YAMATO』として今年12月に上映されようとしているのが今の時代。そんな戦後60年という重大な節目の時代に、こんな風に日本軍の玉砕の悲劇を茶化したシーンを登場させるのはあまりにあまりでは……？

こんなシーンが原作にあるのかどうか私は知らないが、この映画の村上正典監督がそれをどう考えているのか是非答えてもらいたいものだ。また、この映画の音楽を担当した服部隆之氏は、私が尊敬する大音楽家である服部克久氏の息子。その服部隆之氏もこの、よしが、たむら、むとうの3人組による、茶化された刺激的な戦闘シーンをどのように考えているのか、是非その見解を聞かせてもらいたいものだ。

ネット上のヒーローになるのも大変！

この映画の主人公である電車男はある意味では、今の時代のヒーロー的人物であることはまちがいない。現在のネット界のヒーローといえば、第1にソフトバンクの孫正義氏、第2に楽天の三木谷浩史氏、第3にあのライブドアのホリエモンこと堀江貴文氏。ホリエモンは、プロ野球の球界再編成と新球団創設というテーマでは、資本力が1ケタ違う楽天に敗れたものの、フジテレビ「抗争」では、一世を風靡する快男児となった。しかし、パソコンおたくや、ネットおたくはたくさんいても、この孫正義氏、三木谷浩史氏、堀江貴文氏のように大成功をおさめているのは例外中の例外。その多くは、この映画の主人公の電車男やケッタイ

な3人組ヲタクなようなもので、社会的に埋もれた存在となっているはず。

シンデレラは昔は女、しかし今は……？

しかし考えてみれば、昔の「シンデレラ物語」は貧しく、虐げられているかわいそうな女の子がたまたま「王子様」と出会い、最後に結婚式を挙げてハッピーエンドで終わるといったものだった。しかしそれは今や昔のお話。今の時代の「シンデレラ物語」は、自分1人では女の子をゲットすることなど夢のまた夢というオタク男が、何十万分の一という確率の末に、お姫サマのような優雅で美しい彼女と出会い、紆余曲折を経て、最後に幸せを掴むというもの。つまりシンデレラは、昔は女の子だったが、今は力関係が逆転し、シンデレラ物語の主人公が男に転化しているわけだ。

あくまでこれは幻想の世界だよ！

前述のように、インターネット上の物語は、何が現実で何が架空なのかの区別がつかなくなるのが最もコワイこと。そしてこの映画では、22歳の今まで「彼女いない歴22年」のパソコンおたくの電車男が、これまたヘンなパソコンおたくの応援団からの心のこもった(?)応援に力を得て、結果的に超セレブなお姫サマをゲットする結果に……。

しかし、この映画を観る多くの若者、とくにオタク青年たちに警告しておきたいのは、この映画でスクリーン上に展開される物語はすべて架空の話であって、現実にはありえない話だということ！ そもそもこんな美人で、性格が良くて、大金持ちのお嬢サマに彼氏がないはずがない！ いくら受け入れたくなくても、それが厳しい現実であって、世の中は決してこの映画のように甘くはないということを肝に銘じてもらいたいものだ……。そうでなければ、バカな若者がこの映画のマネをして、電車の中で困っている美女を救おうとチョッカイを出したために、いきなりグサリ……。なんて悲劇が生まれるかも……？

2005(平成17)年5月27日記